人間文化創成科学論叢　第14巻　2011年

英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・行動と異文化受容態度との関連

堀　切　友紀子*

Japanese Learners' Use-acts, Emotions, Recognitions of loanwords and their Acculturation Strategies: The Case of Native Speakers of English

HORIKIRI Yukiko

abstract

The purpose of this study is to clarify the use-acts, emotions, and recognitions which Japanese learners have regarding Japanese Loanwords and their relation to Acculturation Strategy. An investigation of 104 Japanese learners was conducted by questionnaire; all of learners were Native speakers of English.

The study found that Japanese learners' use-acts of Japanese Loanwords can be classified in terms of 'Avoidance', 'Passive-Use' and 'Adaptation with Occasion'. Their emotions towards Japanese loanwords are identified as 'Incongruity', 'Uneasiness and Resistance', 'Interest', and 'Convenience'. The learners' recognitions of Japanese Loanwords consist of 'Improperness', 'Variation of English', and 'Acceptance of change'. Moreover, Incongruity toward Japanese loanwords is related to two Acculturation Strategies: *separation* and *marginalization*. On the other hand, Adaptation with Occasion is related to *integration* of Acculturation Strategy.

The findings suggest a relationship between Japanese Loanwords and Acculturation Strategies. Furthermore, this study found that Adaptation with Occasion of Japanese Loanwords supports Japanese learners' *integration* of Acculturation Strategies.

【Keywords】Native Speakers of English, Japanese Loanwords, Incongruity, Adaptation with Occasion, Acculturation Strategy

1．問題の所在と研究目的

1.1　英語母語話者にとっての外来語学習

一般的に「外来語」とは、西洋の言語から日本語の中に入ってきたことばを指す（石綿，2001）ことから、日本語母語話者の間では、英語を母語とする日本語学習者には外来語の理解や使用は容易であろうという認識がある（飛田，2001）。一方で、日本語学習者全般の傾向としては、その多数が外来語の学習や使用に困難を感じているという報告がなされており（中山・陣内・桐生・三宅，2008[1]）、日本語教育においては、学習者にとって外来語は苦手な項目であるという認識がある。しかし、英語母語話者自身の意識に焦点を当て、彼らがどのように外来語を捉えているのかを明らかにした研究は、これまであまりなされてこなかったのが現状である。

キーワード：英語母語話者、外来語、違和感、使い分け行動、異文化受容態度

＊平成17年度生　国際日本語学専攻

この問題を語彙習得の面から捉え、日本語学習者は外来語をどの程度習得しているかを明らかにしたものに上野山（2010）がある。そこでは、大学で日本語を学ぶ学習者1846名[2]の学習者を対象に質問紙調査を行った結果、英語圏の学習者は外来語を習得する際に、英語との語形の大きな違いが見られない語彙が習得されやすいことが明らかになった。また、使用頻度の高い語彙と、来日経験や日本人の友人の有無との相関が見られたことから、外来語の習得には学習者の置かれている環境や経験が影響を与えている可能性が示されている。しかし、この調査では外来語の理解や使用の度合いのみを取り上げており、外来語を使用する際の学習者の意識という側面は検証されていない。

この学習者が外来語を捉える際の意識を中心に据えた研究として、日本国内の学習者479名[3]を対象に質問紙調査を行った陣内（2008）がある。そこでは、中国語・韓国語母語話者は日本語の外来語に対して抵抗感を抱く傾向があり、それ以外の言語の母語話者はあまり抵抗を感じないという、学習者の母語による違いがあることが明らかにされた。しかし、この調査において英語母語話者は回答者数が20名と僅少で、母語比較の際のグループとしては取り上げられていない。

海外における日本語教育機関のうち、英語圏である欧米諸国は、他の地域に比べて高等教育機関の割合が高く（国際交流基金，2006）、日本国内の留学生のうち短期留学生の内訳は、欧米諸国からの大学・大学院生が全体の33.8%と高い割合を占めている（日本学生支援機構，2011）。このことから、日本国内において日本語を学習している英語母語話者は、その多くが大学・大学院の留学生や研究者という立場であると考えられる。このような留学生や研究者は、第１文化をほとんど獲得した上で第２文化（日本語や日本の学術）を獲得する学習者であり、「２つの文化に対して本人がどのような態度を持つかという文化受容態度が重要な問題となる」（井上，2001）ことが指摘されている。つまり、英語を母語とする日本語学習者を捉える上で、第２文化となる日本文化にどのような態度で臨むかという姿勢に注目する必要があると考えられる。

1.2　異文化受容態度と外来語

異文化受容態度における代表的な理論として、時間の経過とともに変化していく異文化適応モデルがある。Lysggard（1955）は、異文化適応過程におけるＵカーブ仮説を提唱し、その段階はハネムーン期、葛藤期を経て回復期へと移行し、二文化並立期へ向かうという心理的過程をたどることを示した。この仮説を発展させ、帰国後の心理的な変化を加えたのがGullahorn & Gullahorn（1963）のＷカーブ仮説である。これらは異文化適応が時間的・段階的に変化していくというプロセスに焦点を当てたモデルであるが、変化のプロセスの様々なバリエーションの実態や具体的な時期が明確になっていないという問題がある。また、実証的な研究が少なく、理論として根拠が弱いことから、類型化のモデルが提唱されるようになった。

その類型化モデルの代表的なものが、自文化とホスト文化に対する態度を軸に分類したBerry（1997）である。Berry（1997）においては、異文化受容の際の自文化とホスト文化に対する態度を４象限に分け、適応の類型を「同化」「分離」「統合」「境界」と分類している。「同化」とは、自分の文化的アイデンティティを保持することを求めず、ホスト文化との相互作用のみを求めている場合である。反対に、自分の文化を保持することに価値を置き、ホスト文化との相互作用を避ける場合、「分離」と定義される。また、自分の文化とホスト文化との相互作用の両方に価値を置く場合は「統合」であるとされ、その反対が「境界」である。この類型化モデルを採用した研究は、数多くなされてきた（Kim & Gudykunst, 1988; Sam & Berry, 2006など）。

この異文化受容態度が、英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する態度と関連していると考え、外来語受容態度を測定したのが堀切（2008）である。そこでは、英語母語話者93名を対象に質問紙調査を行い、日本語学習者の持つ外来語受容態度は「積極的受容」、「英語優位性」、「英語干渉」、「拒絶」の４因子からなることを明らかにした。しかし、この調査では対象者がどのように外来語を英語と関連付けて捉えているかを具体的に検証しておらず、したがって外来語の中の自文化とホスト文化の要素の関連が明らかにされていないという限界がある。

その問題を解決するために、堀切（2010）は、英語母語話者11名を対象に、彼らがどのように外来語を英語と関連づけて捉えているのかを、半構造化インタビューを用いた質的な分析によって明らかにした。その結果、外来語に対する認識には「日本語としての外来語」と「英語としての外来語」が存在することが示された。また、

外来語に対する感情には「肯定的感情」と「否定的感情」が存在し、外来語使用行動には「積極的使用」、「文脈を意識した使い分け」、「消極的使用」という３つの行動が存在することが明らかになった。さらに、外来語を自分の母語として捉える度合いが、ホスト文化の枠組みで捉える度合いと関連していることが示唆されている。しかし、これは日本滞在期間が約１カ月半と短期の学習者のみを対象にした質的な分析結果であるため、中・長期間日本に滞在する学習者を含む幅広い対象者への汎用性は検証されていない。

以上の現状を踏まえ、本研究はこれまで明らかにされてこなかった英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・使用行動と異文化受容態度との関連を実証的に明らかにすることを目的とする。

２．研究方法

2.1　調査時期と対象者

2010年６月から９月にかけて、日本国内の大学機関に所属し、日本語を学習する大学生、大学院生、研究者および職員を対象に質問紙を129部配布した。その結果、114部を回収した（回収率は88.3％）。そのうち、本研究では、母語が英語であると回答した104部を分析の対象とした。対象者の属性は男性55名、女性49名、平均年齢は25.8歳であり、国籍はアメリカ88名、イギリス７名、オーストラリア４名、その他５名であった。また、日本語学習歴は平均４年１カ月であり、日本滞在期間は平均２年３カ月であった。さらに、日本語能力に関しては岩男・萩原（1988）の自己評価尺度を用いて測定した結果、初級程度から上級以上と幅があった。

2.2　質問紙

本研究における調査では、英語由来の外来語を対象とし、質問紙に「この調査では『外来語』はカタカナで書かれている外国語由来（特に英語）の借用語を意味します」と明記した。質問紙の表記は全て日本語と英語を併記し、英語は表現の自然さや誤解を招く可能性のないことをネイティブチェックにより確認した。本調査の質問項目は、外来語に対する認識・感情・使用行動、および異文化受容態度に関する質問と、フェイスシートから構成される。

まず、外来語に対する認識に関しては、「以下の外来語に対する意見について、あなたはどの程度そう思いますか」と尋ね、12項目の質問に対して回答を求めた。次に、外来語に対する感情に関しては、「あなたは外来語についてどのように感じていますか」と尋ね、23項目の質問に対して回答を求めた。さらに、外来語の使用行動に関しては、「あなたは日本語を話す時、どのように外来語を使用していますか」と尋ね、12項目の質問に対して回答を求めた。以上の項目は、堀切（2010）で明らかになったカテゴリー構造をもとに概念を抽出して作成し、「とてもそう思う」から「全くそう思わない」の５件法での評定を求めた。また、異文化受容態度に関してはBerry et al.（2006）のAcculturation Attitudes20項目を使用した。フェイスシートでは国籍、母語、年齢、性別、学年、専攻、日本語学習期間、日本滞在期間、既習外国語数、第二言語の有無を尋ね、日本語能力の自己評価による記入を求めた。

３．分析結果

3.1　外来語に対する認識（因子分析）

日本語学習者の外来語に対する認識の構造を明らかにするため、得られた回答に基づき、主成分分解・バリマックス回転で因子分析を行った。初期の固有値と項目内容の解釈可能性から３因子構造が妥当と判断し、因子負荷量が.40を超え、かつ複数の因子に重複して負荷のない項目を選択し、計９項目で再度分析を行った。因子妥当性及び信頼性を確認した各因子負荷量、ならびに項目の内容を表１に示す。

第１因子は、「外来語は正確な日本語ではないと思う」、「外来語は正しくない英語であると思う」などの正しくない言語とする認識からなり、「非正統性」と命名した。第２因子は、「外来語は日本語の中に出現する英語であると思う」などの英語として捉える認識からなるため、「英語の変種」と命名した。第３因子は、「外来語は英語を日本語の枠組みの中で捉えたものだと思う」など、外来語が日本語に変化したことを受容する認識からなる

ため、「変化の受容」と名付けた。以上のように、外来語についての認識は「非正統性」、「英語の変種」、「変化の受容」の３因子によって構成されることが示された。

表１　外来語に対する認識の各尺度の項目内容と因子負荷量

因子	尺度項目内容	Fac1	Fac2	Fac3
非正統性 α=.752	C６ 外来語は正確な日本語ではないと思う	**.892**	.005	.037
	C８ 外来語は本物の日本語らしくないと思う	**.776**	.312	-.041
	C11 外来語は正しくない英語であると思う	**.661**	.309	.074
英語の変種 α=.748	C７ 外来語は英語でなく日本語の言葉であると思う（逆転）	.058	**.821**	.080
	C10 外来語は日本語の中に出現する英語であると思う	.337	**.729**	.181
	C１ 外来語は英語の言葉を日本語アクセントで発音したものだと思う	.361	**.667**	.329
変化の受容 α=.506	C３ 外来語は英語を日本語の枠組みの中で捉えたものだと思う	.131	-.047	**.856**
	C５ 外来語は日本語風に変化した英語の一種であると思う	.139	.292	**.641**
	C９ 外来語は英語でもあり日本語でもあると思う	-.187	.181	**.556**
	累積寄与率（%）	23.92	45.77	63.66

3.2　外来語に対する感情（因子分析）

同様に、外来語に対する感情を明らかにするため、因子分析を行った。初期の固有値と項目内容の解釈可能性から４因子構造が妥当と判断し、因子負荷量が.40を超え、かつ複数の因子に重複して負荷のない項目を選択し、計19項目で再度分析を行った。因子妥当性及び信頼性を確認した項目内容と因子負荷量を表２に示す。

第１因子は、「外来語は適切ではないと思う」、「外来語は変だと思う」などの項目からなり、「違和感」と命名した。第２因子は、「外来語を使うのは恥ずかしい」、「外来語を使うことに対して自信がない」など、外来語使

表２　外来語に対する感情の各尺度の項目内容と因子負荷量

因子	尺度項目内容	Fac1	Fac2	Fac3	Fac4
違和感 α=.810	B15 外来語は適切ではないと思う	**.850**	.228	.025	.004
	B５ 外来語を使うのは頭が悪いと思う	**.763**	.138	-.061	-.025
	B11 外来語を使うのは怠けているように感じる	**.744**	.010	-.125	.021
	B10 外来語は変だと思う	**.628**	-.099	-.107	-.205
	B16 外来語はたくさんあり過ぎると感じる	**.596**	.012	-.295	-.257
	B１ 外来語は役に立つと思う（逆転）	**.565**	.272	-.291	-.011
	B13 外来語はナンセンスだと思う	**.555**	-.144	-.331	-.167
不安・抵抗感 α=.860	B21 外来語を使うのは恥ずかしい	.097	**.875**	-.045	.045
	B22 外来語を使うとき神経質になる	-.061	**.868**	-.120	-.060
	B19 外来語を使うことに対して自信がない	-.049	**.765**	.011	-.343
	B20 外来語になかなか慣れることができない	.378	**.662**	-.226	-.222
興味 α=.771	B23 外来語はかわいいと思う	-.021	-.090	**.817**	-.017
	B14 外来語はかっこいいと思う	-.262	-.077	**.719**	.091
	B18 外来語はユニークだと思う	-.134	-.023	**.746**	.111
	B２ 外来語は面白いと思う	-.345	-.206	**.559**	**.016**
便利さ α=.727	B７ 外来語は理解しやすいと思う	-.072	-.134	-.001	**.791**
	B４ 外来語は使いやすいと思う	.012	.045	.171	**.772**
	B６ 外来語に混乱する（逆転）	-.179	-.165	-.079	**.658**
	B９ 外来語は覚えやすいと思う	-.146	-.372	.261	**.501**
	累積寄与率（%）	18.88	34.46	48.38	60.16

用に抵抗を感じたり、不安を抱いたりする項目からなるため、「不安・抵抗感」と命名した。第３因子は、「外来語はかわいいと思う」などの肯定的な感情や「外来語は面白いと思う」という外来語に対する興味を表すものからなるため、「興味」と命名した。第４因子は、「外来語は理解しやすいと思う」などの外来語使用に利便性を感じるものからなるため、「便利さ」と命名した。以上のように、外来語に対する感情は「違和感」、「不安・抵抗感」、「興味」、「便利さ」の４因子によって構成されることが示された。

3.3　外来語の使用行動（因子分析）

日本語学習者の外来語の使用行動の構造を明らかにするため、得られた回答に基づき、因子分析を行った。初期の固有値と項目内容の解釈可能性から３因子構造が妥当と判断し、因子負荷量が.40を超え、かつ複数の因子に重複して負荷のない項目を選択し、計10項目で再度分析を行った。因子妥当性及び信頼性を確認した各因子負荷量、ならびに項目の内容は表３の通りである。

表３　外来語使用行動の各尺度の項目内容と因子負荷量

因子	尺度項目内容	Fac1	Fac2	Fac3
回避 α=.727	A10 日本語の流暢さを損ないたくないので外来語を使用しない	**.840**	.069	-.100
	A12 自分の日本語に自信を持ちたいので外来語を使用しない	**.757**	.132	-.107
	A２ 誤解を避けるために外来語を使用しない	**.727**	-.060	.067
消極的使用 α=.488	A　 周囲により自然に聞こえるよう外来語使用している（※逆転）	-.077	**.716**	-.256
	A５ 自分の語彙を増やすために外来語を使用する（※逆転）	.219	**.608**	-.320
	A３ 和語が分からない時だけ外来語を使用する	.399	**.559**	.116
	A１ 日本語で言葉を知らない時自分で外来語を作って試してみる	-.265	**.462**	.191
	A８ 他に選択肢がないので外来語を仕方なく使う	.204	**.425**	.388
使い分け α=.453	A11 文脈によって外来語と和語を使い分けている	-.062	.032	**.740**
	A６ 外来語であれ和語であれより一般的な方を使う	-.070	-.180	**.739**
	累積寄与率（%）	21.41	37.87	52.75

第１因子の項目は、「日本語の流暢さを失いたくないので外来語を使用しない」、「誤解を避けるために外来語を使用しない」などの項目からなり、「回避」と命名した。第２因子の項目は「和語が分からない時だけ外来語を使用する」、「他に選択肢がないので外来語を仕方なく使う」など、外来語を使用する際に消極的な行動をとるものであり、「消極的使用」と命名した。第３因子の項目は、「文脈によって外来語と和語を使い分けている」、「外来語であれ和語であれより一般的な方を使う」という項目からなり、外来語を和語と使い分けている行動を表していることから、「使い分け」と命名した。以上のように、外来語の使用行動は「回避」、「消極的使用」、「使い分け」の３因子によって構成されることが示された。

3.4　異文化受容態度

調査に用いたBerry et al.（2006）の異文化受容態度は、平均15.35歳の移民（immigrant youth）を対象としていたが、本研究の対象者は平均年齢が25.8歳であり、既に第一文化を獲得していると想定されること、また自らの意志で言語学習を行っていることから、既存の尺度を全て援用することは適切ではないと考えた。そこで、本研究はBerry et al.（2006）の20項目のうち、自文化・ホスト文化との相互作用という視点を最も反映している社会的活動に関する４項目を分析の対象とした。各項目の内容と記述統計は表４の通りである。

表 4　異文化受容態度の項目内容と記述統計

	項目内容	平均値	標準偏差
統合	E13 日本人と西洋人の両方が関わる社会的活動を好む	4.05	.79
同化	E16 日本人のみが関わる社会的活動を好む	2.00	.99
分離	E19 西洋人のみが関わる社会活動を好む	1.49	.68
境界	E18 日本人または西洋人が関わる社会的活動に参加したくない	1.54	.86

3.5　認識・感情・使用行動と関連属性、異文化受容態度の関連（相関分析）

上記で得られた外来語に対する認識・感情・使用行動の各因子間の関連や、それらが学習者の属性や異文化受容態度とどのような関係にあるかを明らかにするため、相関を求めた。具体的には、外来語に対する認識・感情・使用行動の各下位尺度に含まれる項目の単純加算平均値を算出して尺度得点とし、ピアソンの相関係数を用いて下位尺度間、対象者の関連属性、異文化受容態度との相関を求めた。

その結果、外来語使用行動の「回避」は、「違和感」、「不安・抵抗感」、「非正統性」、「英語の変種」と正の相関（r＝.563, r＝.336, r＝.394, r＝.246）、「興味」と弱い負の相関（r＝-.247）が見られた。このことから、外来語を英語の変種として捉え非正統性を認識すると、違和感や不安・抵抗感を抱いて回避行動へと向かう傾向が示された。

一方、外来語使用行動の「使い分け」は、「興味」、「変化の受容」と正の相関（r＝.320, r＝.213）が見られ、「不安・抵抗感」、「非正統性」と弱い負の相関（r＝-.286, r＝-.238）が見られた。このことから、外来語が日本語に変化したことを受容する認識が強い場合は、外来語に対して不安・抵抗感を感じることなく興味を抱き、外来語を使い分ける傾向にあることが示された。一方で、外来語の非正統性を強く認識して不安・抵抗感を抱いた場合は、使い分けという使用行動には結び付かない傾向が示された。以上の結果は、堀切（2010）における質的研究の結果を支持するものであった。

また、外来語に対する認識・感情・使用行動と異文化受容態度との相関については、外来語に対する「違和感」が、異文化受容の「分離」、「境界」と弱い正の相関（r＝.233、r＝.214）にあることが明らかになった。また、外来語に対する感情の興味」と外来語使用行動の「使い分け」が、異文化受容態度の「統合」とそれぞれ弱い正の相関（r＝.235、r＝.258）を示した。

3.6　認識・感情・使用行動の異文化受容態度への影響（重回帰分析）

以上の結果から、外来語に対する認識・感情・使用行動と異文化受容態度の関連が示されたため、異文化受容態度 4 因子を基準変数とし、外来語に対する認識 3 因子、外来語に対する感情 3 因子、外来語使用行動 3 因子、対象者の関連属性を説明変数としたステップワイズ法による重回帰分析を行った。結果を表 5 に示す。

分析の結果、「統合」の異文化受容態度には、「使い分け」が正の影響を、日本語能力が負の影響を及ぼしていることが示された。つまり、日本語能力が低く、外来語と和語との使い分けを行っている人は、自文化のアイデンティティの保持とホスト文化との相互作用との両方に価値を置く「統合」の異文化受容態度となる傾向があることが分かった。

また、「分離」と「境界」の異文化受容態度には、「違和感」が正の影響を与えていることが示された。つまり、外来語に対して適切ではない、変だという違和感を抱く

表 5　異文化受容態度を基準変数とした重回帰分析結果

	統合	同化	分離	境界
CF1 非正統性	-.041	-.024	-.097	-.175
CF2 英語の変種	.071	.035	.008	.011
CF3 変化の受容	.104	-.146	.089	-.048
BF1 違和感	-.087	.089	**.223***	**.241***
BF2 不安抵抗感	.061	-.101	.049	-.052
BF3 興味	.132	-.049	.091	.185
BF4 便利さ	-.169	.097	.018	.162
AF1 回避	-.045	.013	.050	-.151
AF2 消極的使用	-.158	-.127	-.009	-.007
AF3 使い分け	**.258****	.070	.020	-.028
日本語学習期間	-.018	.203	.144	-.038
日本滞在期間	.042	-.113	-.081	.057
外国語学習数	-.046	-.184	-.085	-.120
日本語能力	**-.313*****	-.005	.093	-.111
決定係数R^2	**.127*****	-.044	**.040***	**.048***

***p＜.001 **p＜.01 *p＜.05（数値は標準偏差回帰係数）

場合には、自文化のアイデンティティの保持にのみ価値を置き、ホスト文化との相互作用を重視しない「分離」、または自文化の保持にもホスト文化との相互作用にも価値を見出さない「境界」の異文化受容態度となりやすいことが分かった。

「同化」に関しては、本研究においては外来語に対する認識・感情・使用行動、および対象者の属性要因からの影響は見られなかった。

4．考察及び今後の課題

本研究では、英語を母語とする日本語学習者の外来語に対する認識・感情・使用行動の構造を検討したところ、外来語に対する認識３因子、感情４因子、使用行動３因子が抽出された。さらに、異文化受容態度を基準変数とし、関連要因を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、日本語能力と「使い分け」行動が、「統合」に、外来語に対する「違和感」が「分離」と「境界」に影響を与えていることが示された。

まず、日本語能力が初級の段階で外来語と和語と使い分けている人は、自文化のアイデンティティの保持とホスト文化との相互作用との両方に価値を置く「統合」の異文化受容態度となる傾向が示された。この背景には、学習者が日本語学習の初級段階において、外来語を日本語の枠組みで捉えようとする客観的な姿勢があることが考えられる。つまり、本研究の対象者においては、日本語の知識が十分に豊富ではない状態でも、外来語の語源である英語と、それが変化した日本語の語彙としての外来語を客観的に区別できていると考えられる。さらに、自らとは異なる要素（＝日本語）を母語の枠組み（＝英語）に当てはめようとするのではなく、そのまま受容する態度を持ち合わせていることが推測される。母語である英語を肯定的に意識化した上で、日本語という異なる言語の枠組みを客観的に理解して、外来語を使い分けようとする態度が、異文化受容においても「統合」の態度となる傾向があると思われる。

次に、外来語に対して違和感を抱く場合には、自文化のアイデンティティの保持にのみ価値を置く「分離」の異文化受容態度となりやすいことが明らかになった。これは、外来語に接した際に、母語である英語の枠組みで捉えようとするために、英語と逐語的に対応していないことに違和感を抱いていることが背景にあると考えられる。この自分の母語に基準をおいて判断する姿勢が、異文化受容において「分離」の態度へとつながっているのではないかと思われる。

同様に、外来語に対して違和感を抱いている場合には、自文化の保持にもホスト文化との相互作用にも価値を見出さない「境界」の異文化受容態度となりやすいことが示された。これは、外来語に対して「正しくない英語」としての違和感と、「正しくない日本語」としての違和感を抱いた結果、外来語を英語の枠組みでも日本語の枠組みでも捉えることができず、不安定な状態になっていると考えられる。この状態が、異文化受容において自文化の保持にもホスト文化との相互作用にも明確な価値を見いだせない「境界」という態度へとつながるのではないかと思われる。

また、「同化」については、外来語に対する認識・感情・使用行動から影響を受けていないことが明らかになった。この背景としては、本研究の調査対象者は、平均年齢も高く、自らの意志で来日して日本語を学んでいる学習者であったことが考えられる。つまり、今回の対象者は、既に自文化のアイデンティティはある程度確立していると考えられ、外来語に対してどのような意識を持とうと、ホスト文化との相互作用のみに価値を置く「同化」の態度となりにくかったことが考えられる。

以上の考察から、次の２点が明らかになった。まず、外来語に対して「適切ではない」、「変だ」という違和感を抱いた場合には、異文化受容において、ホスト文化との相互作用に価値を見出さない「分離」や「境界」の態度になることが示唆された。このことから、外来語に対して違和感を抱く傾向は、異文化受容においてもホスト文化の中に積極的に参入しようとしない状態を表している可能性が考えられる。「違和感」とは、言語学習の過程で自らの母語を基準としそれとは異なるものを「誤ったもの」とする姿勢であり、これは異文化環境において自文化主義的傾向へとつながる可能性が推察される。自文化主義が、自分の文化を基準に相手文化を「評価」するのに対し、文化相対主義は文化的文脈が多種多様であることを「説明」しようとする態度である（佐藤，1997）。つまり、日本語学習場面で外来語に違和感を抱いている学習者に対しては、日本語学習場面で自らの母

語や母文化と異なるものを客観的に認識できるように情報を提供し、その上で自分なりの解釈・理解を促すことで、異文化受容においても統合的な対応へと繋がると考えられる。

次に、日本語学習が初級の段階において外来語を使い分けられる学習者は、外来語を含む異文化の要素を客観的に受け入れる準備ができている状態にあることが示された。つまり、外来語を効果的に学習・使用することにより、言語学習と同様に社会文化の変化に応じた言語変化を学習するという「外来語学習の利益」（大島，2005）を享受することが可能になると考えられる。このような場合には、外来語が２つの言語や文化を理解する上での「かけ橋」の役割（陣内，2007）を果たし、外来語が言語学習を超えて異文化受容においても効果的な役割を果たしていると思われる。

以上のように、英語を母語とする学習者の言語学習場面での外来語に対する感情や使用行動が、異文化受容態度を予測する指標となる可能性や、外来語が異なる言語や文化を理解する上での媒介となる可能性が示唆された。さらに、日本語学習において外来語をより客観的に捉える機会を教育現場で提供することが、その後の効果的な言語学習や異文化受容へと繋がる可能性も示唆された。

本研究は、限られた対象者を対象とした調査であるため、その結果を過度に一般化することはできない。今後は、学習者の学習環境の違いなども考慮に入れ、多様な観点から総合的に解釈していく必要がある。また、本研究の知見を生かし、今後は、外来語を異文化理解促進と関連させて扱うプログラムを開発し、学習者の効果的な日本語能力向上と異文化理解に繋げていく必要性があると考える。

〈付記〉　本調査にご協力頂きました留学生の皆様には、心より御礼を申し上げます。また、本論文の執筆に際しご指導を頂きました加賀美常美代先生には、心より感謝申し上げます。

参考文献

石綿敏雄（2001）『外来語の総合的研究』東京堂出版

井上孝代（2001）『留学生の異文化間心理学　文化受容と援助の視点から』玉川大学出版部

岩男寿美子・萩原滋（1988）『日本で学ぶ留学生―社会心理学的分析―』勁草書房

上野山愛弥（2010）「日本語学習者の外来語習得―地域別にみられる習得の傾向―」『産業と経済』24(5)、1-20.

大島希巳江（2005）「日本語としての外来語―そのステイタスと日本語化プロセス―」『アジア英語研究』７、5-25.

国際交流基金（2006）『海外の日本語教育の現状－日本語教育機関調査2006年　概要』国際交流基金

陣内正敬（2007）『外来語の社会言語学　日本語のグローカルな考え方』世界思想社

陣内正敬（2008）「日本語学習者のカタカナ意識とカタカナ語教育」『関西学院大学　言語と文化』11、47-60.

飛田良文（2001）『異文化接触論　日本語教育学シリーズ　第１巻』おうふう

中山恵利子・陣内正敬・桐生りか・三宅直子（2008）「日本語教育における「カタカナ教育」の扱われ方」『日本語教育』138、83-91.

日本学生支援機構（2011）『平成22年度外国人留学生在籍状況調査報告』独立行政法人　日本学生支援機構

堀切友紀子（2008）「日本語学習者の外来語に対する苦手意識と受容態度―英語母語話者の場合―」『異文化間教育』28、74-86.

堀切友紀子（2010）「英語を母語とする日本語学習者の外来語使用行動の実態とその背景要因」『言語文化と日本語教育』39、104-111.

Berry, J. W. (1997) Lead Article Immigration, Acculturation, and Adaptation, Applied Psychology: An International Review, *International Association of Applied Psychology*, 46(1), 5-68.

Berry, J. W. (2001) A Psychology of Immigration, Journal of Social Issues, *The Society for the Psychological Study of Social Issues*, 57(3), 615-631.

Berry, J. W., Poortinga, Ype H., Segall, Marshall H., and Dasen Pierre R. (2002) *Cross-Cultural Psychology Research and Applications, Second Edition*, Cambridge University Press

Berry, J. W., Phinney, J. S., Sam, D. L., and Vedder, P. (2006) *Immigrant Youth in Cultural Transition -Acculturation, Identity, and Adaptation Across National Context*, Lawrence Erlbaum Associates Publishers

Gullahorn, John T.; Gullahorn, Jeanne E. (1963) An extension of the U-curve hypothesis, *Journal of Social Issues*, 19(3), 33-47.

Kim, Y.Y., Gudykunst, W.B.(1988) *Theories in Intercultural Communication, International and Intercultural Communication Annual Volume XII*, Sage publications

Lysgaard. S.(1955) Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright grantees visiting the United States. *International*

Social Science Bulletin, 7, 45-51.
Sam D. L., Berry, J. W. (2006) *The Cambridge Handbook of Acculturation Psychology*, Cambridge University Press

註

1　日本語学習者479人を対象に質問紙調査を行った結果、77.9％が「カタカナ語が分からなくて困った経験がある」ことを明らかにしている。

2　対象者の内訳は英語圏（オーストラリア、アメリカ、カナダ）149名、中国690名、台湾421名、韓国215名と、日本国内371名であった。

3　陣内（2008）の対象者の母語の内訳は、中国語49.7％、韓国・朝鮮語20.0％、英語4.2％、その他の言語26.1％であった。